

もと来た道を引き返し、歩き続けた。買物かごをさげた若い主婦が、日傘をさして、道を行く。尋ねると、「目の前だ。」と言う。

僕は、門の前まで、やっと来た。

駅からは大変遠い。バスもそう本数があるわけではない。「これは大変な距離だ。」

そんなことも知らずに、「毎日、通学しているから」と、軽い気持ちで、

「京都」へ出てくるようにと、僕は彼女に、要請していたのだ。

門の前に立ち、自分の力が抜けて行くのが感じた。足が少しだるいのを感じはじめた。日が強い。

門をくぐると、左には竹やぶがあり、右側からオルガンの音に合わせて、子供の歌声が聞こえる。保育園だ。

僕は脱水状態で、もうろうとしていた。子供たちの声と、オルガンの音が僕の頭の中でこだました。



僕は後悔していない